

古代「朱」と巨石遺構

古代、貴重な朱（丹生）を追い求めて壮大な距離を交易した人たちがいた！

柳原輝明

はじめに

2001年秋ごろ、奈良県の東部宇陀郡榛原町に不思議な巨石があるということを知り、地元の人が興味をもち、探訪した。地元では、嶽の立石・寝石と呼ばれ大切にされていたが、それも地元の一部だけで、それ以外の人には殆ど知られていなかった。初めて訪れたとき、麓にある「寝石」はなるほど巨大であるが、他所でもよく見かける巨石が点在しているだけであった。そこから4kmほど山を登ったところにあった「立石」には、その威容に驚いた。

尾根の出っ張りを利用してその頂上部に一際巨大な立石があり、それを二重に取り囲むように立石が林立していた。この姿は、自然の物というより人工的に造られたものに違いないと確信できるほど見事なものであった。そこから谷を挟んで向かい合うように巨大な立石が数本林立しているのが見られた。これほどの巨石を何のためにこのような山中に運び上げたのか不思議に思い、それが榛原の巨石調査を始めるきっかけだった。

その頃、地元の林業家と知り合い巨石の話をしていっていると、その人の持ち山にも巨大なイワクラがあるということ、そしてその一帯にイワクラが点在していることを調査した本があるということで見せてもらった。その本は、林業家の祖父が持っていたもので「神武天皇建国聖地内牧考」菟田野高城 顕彰会 編 竹野次郎 と記されていた。昭和14年の出版で、貴重な調査書である。そこには、榛原町のイワクラについて限なく調査されており、それらイワクラの下部から発見された石鏃をはじめとする縄文時代の遺物の記述まで詳細にされていた。この本から榛原町が縄文の昔から多くの人が住んでいたことが明らかである。そこで新たな疑問が生じてきた。

この榛原町内牧地区は平地も少なく山地は急峻で狭い。少なくとも、食料の採取にはあまり適しているところと思えない。それにも拘らず、古代の遺物である石器などの生活道具や、信仰の対象としてのイワクラがこれほど多量に存在するのはなぜか。

あるとき、古事記の記述の中の「血原」と同名の地名がこの榛原町内牧に存在していたことが先の「神武天皇建国聖地内牧考」から分かった。古事記に言う「血原」は菟田野町の宇賀志といわれているが、この内牧は古代宇賀志村に属していたことが記されていて、この内牧の「血原」が古事記に言う「血原」であると言うことである。

「血原」とは、水銀朱（丹生）の鉱産が平地に溜まって血の野原のように見えることから名づけられたものであろう。この榛原町を含む宇陀地域一帯は大和水銀鉱床に位置し、有名な水銀産地であることを知ったのは後のことである。この一帯がかなり古い時代から、おそらく縄文の昔から水銀朱（今後朱と言う）という貴重な鉱物資源を採取し、精製していたことは十分想像できるし、その朱を手

入れるべく多くの人が交易に訪れ、大いに賑わっていたものと思われる。

これで、榛原町の立石をはじめとする巨石が縄文時代の人類の遺跡であることを考えれば、この地に多くのイワクラが存在することはうなずける。おそらく、立石や山の頂上部に位置するイワクラは、朱の交易に来る人たちの道標の役割を持っていたのであり、いくつかのイワクラは鉾山の安全を祈る場であつたらうし、またそこに生活する人の精神的な安寧を得るための祈りの場であつたらうと思う。また、勝手な思い込みかもしれないが、嶽の山中にある「蛇石」はその形状から見て鉾石から朱を水簸するための装置であるように見える。

このように、榛原町の立石から始まり榛原町一帯の丹生を主体とした古代の「鉾業地帯」「朱の精製工場」そしてそれらを交易する「市」の存在までがイメージでき、縄文時代の我々が持っているイメージとのあまりの違いに驚きを感じ



蛇石 丹生の水簸装置？

じ、これらを何とか検証したいと考えた。

以下は、現段階での報告であり、この研究を通して、縄文時代の壮大でダイナミックな人類の行動が見えてきたように思う。

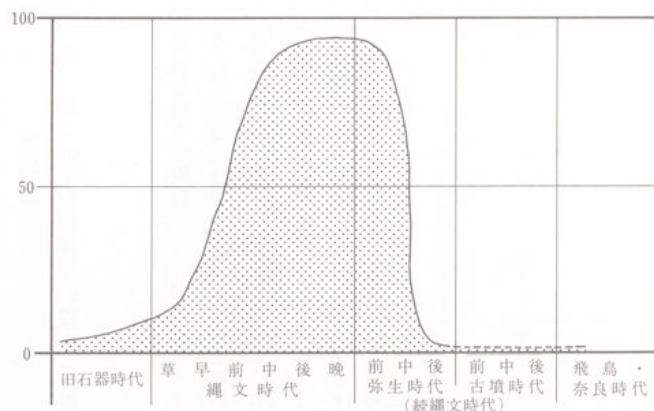
一．朱の歴史

丹生（水銀朱・朱）については多くの人と同様私も殆ど知識がなかった。いわんや、朱が超古代か

ら古代の人が珍重し、それを手に入れようとするなど思いもつかなかったというのが本音である。榛原町に何故これほどのイワクラが、また縄文時代の遺物が大量に存在するのかと言う疑問の先に丹生（朱）という存在が見えてきた。

そこで、丹生（朱）と古代を結びつけるものを探していたとき、市毛勲著の「朱の考古学」を見つけ、同じ頃絶版になっていた「古代の朱」（松田寿男著）を古本屋で偶然見つけた。さらに、同じ頃「石器時代文明の驚異」（リチャード・ラジリー著）のなかに西洋においてもさらに古い時代からオーカー（赤鉄鉱・ベンガラ）採取が行われ、呪術的要素もあるものの傷口や火傷に塗るほか内臓の痛みを直す治療薬として利用していた事が証明されている。以上から、古代、数万年前から日本全国で朱が利用されていたこと、さらにはるか西洋においても同様の風習が存在していた事などが分かった。では、何故朱という鉾業製品が

北方系施朱の風習衰退イメージ



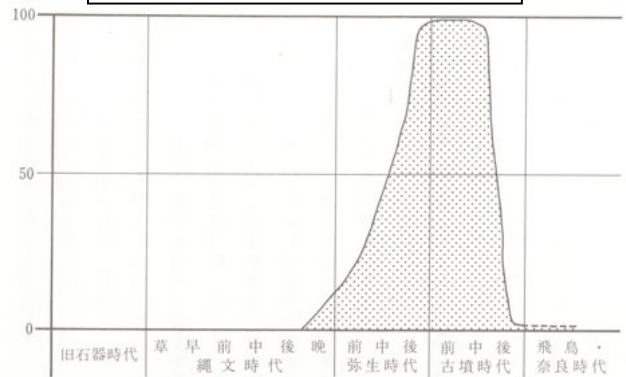
古代の人たちに重要視されたのかと言うと、古代社会にあつて、赤いものは血を連想し生命を失ったもの、失おうとしているものの生命を復活し再生を願うという呪術的な意味合いを持っていたからであろう。また、赤色は太陽を連想し、これも生命の再生と復活をシンボリックにあらわすものとし、

貴重なもの、大切なものとして珍重されてきたからであろう。これらは、古代の墓や人骨に「朱」が塗られていたことで明らかである。

また、赤い色は美しいものという認識があり縄文土器に赤彩色されたものが多く、それを証明している。同じく、縄文遺跡から発掘される「土偶」なども顔などに赤彩色したものが多く、古代において顔などに赤い顔料で化粧することがあったということがわかる。

これらの朱を美しいもの、貴重なものとして、また再生を願う呪術的なものとして利用し始めたのは、北海道から東北にかけての地域では、中石器時代(2〜3万年前)からといわれ、縄文時代中期から弥生時代中期にかけての1万年間が施朱の風習が盛んに行われた時代であり、古墳時代になって急激にその風習は薄れたといわれている。九州から畿内にかけての西日本では、施朱の風習は縄文時代晚期から古墳時代中期まで盛んに行われたと言われている。

西方系施朱の風習衰退イメージ



(朱の考古学 市毛勲 著)

二. 古代人の朱に対する思い

古代人の朱を尊ぶ思いは、全世界共通であり、ヨーロッパでは数万年まえの地層から朱(オーカ)が発見され、日本の縄文時代と同様顔料として、また死者が永遠

にこの地にとどまることを願って死者とともに埋葬していたと思われる。

この朱に対する思いは、現在の我々が金やダイヤモンドなどの鉱物資源を追い求める気持ちと同様か、あるいは現代人にとってこれら鉱物資源は物質的な欲求に突き動かされているのに比べ、古代人のそれは死者の再生を願い、精神的な安寧を得るための宗教儀式に必要とする純粋な欲求からきており、よりその求める気持ちは強かったであろうと想像できる。

朱はどこでも採れるわけではなく、特に水銀朱は伊勢から九州にかけての「中央構造線上」及び北陸の一部に限られている。しかも、その鉱脈は小さく量も少ないことからその貴重性は計り知れないものがあつたと思われる。

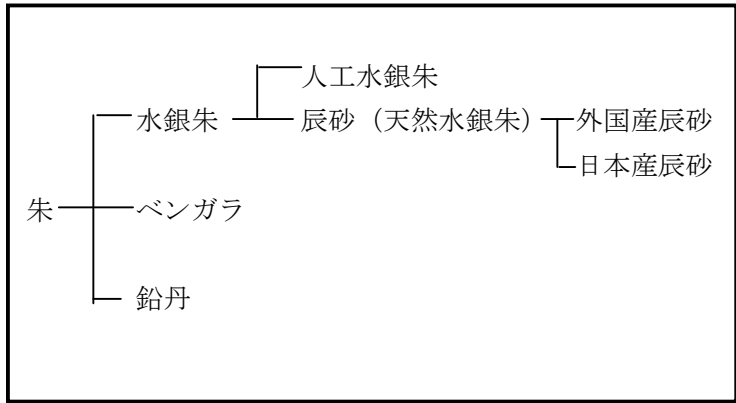
水銀朱は、岩石を砕き、粉状にしたうえで比重の差を利用して水銀朱を分離していたと思われる。そこに、鉱脈から岩石を掘り出し、水銀朱を分離するまでの一連の作業が組織的に行われていた可能性

がある。当然そこに組織を動かす「長」が存在した可能性も高い。また、これら水銀鉱山を目当てに川を遡って来る交易人がいたと推定

できる。そこには交易の場として「市」が立ったと思われる、そこに集まる人を相手にする様々な職業の人がいたと想像できる。交易の場所に至る道には、その分かれ道等の要所に目印として巨大な「イワクラ」を「道標」として設置した可能性も考えられる。住居跡周辺に存在する「イワクラ」は、採掘の安全を祈る場であつたかもしれない。

三. 朱の種類

日本の古代赤色顔料は、水銀朱、ベンガラ(赤鉄鉱など)、鉛丹に限られている。これらは何れも化合物であるから製造することは可能であるが、日本の古代の朱、特に水銀朱とベンガラは天然に産するものが主として利用された。



① 辰砂(天然水銀朱)
辰砂は水銀の原鉱で赤色を示し、日本の水銀は辰砂の精錬によって得られ、天然水銀が産することは珍しいと言われる。日本の辰砂は各種の岩石を

母岩としているため、きれいな色彩の水銀朱を得るには、辰砂を砕き、磨り潰して粉末としたあとに水篩しなければならぬ。

② ベンガラ

ベンガラは赤色を示す酸化鉄で、天然と人工の両方がある。天然は日本全土どこにでも産出するといわれ、この点辰砂と著しい違いがある。

古代では赤鉄鉱を砕き、粉末にして施朱の風習や土器顔料に利用した。

(縄文時代のベンガラ製造)
(赤星直忠の研究)
水酸化第2鉄を加熱↓固形ベンガラ↓砕き、磨り潰して粉状にする↓朱塗り土器に保存(交易にも利用)

日本列島で顔料として最初に表れた色はベンガラの赤であった。その後今日にいたるまで絶えることなく顔料に利用されてきた。古墳時代の石室壁面の赤色顔料は全てベンガラと見られ、ベンガラを塗布することで室内の酸素を奪い酸欠状態を起こして遺骸を保存するという役割があったといわれている。

③ 鉛丹

鉛丹は天然には産せず、人工品であり、水銀朱、ベンガラとは異なる。

四. 朱の産地

朱の生産遺跡や古代の朱の産地については、松田寿男著の「古代の朱」に詳しい。氏は、十数年を費やして丹生の地名と丹生神社の存在する場所を探索し、実際に水銀の含有量を調査している。同様に毛勲著の「朱の考古学」にも詳しい。以下それら

を紹介する。

1 縄文時代水銀朱生産遺跡

縄文時代水銀朱塗遺物は、東北北部から九州北部域の広い範囲で発見されている。縄文時代の水銀朱は、土製品・木製品の顔料に用いられたが、千葉県内野第一遺跡出土の縄文晩期初頭の男子成人骨と幼児骨に水銀朱が付着して発見された。これは、水銀朱塗植物繊維が腐敗焼失して水銀朱が残ったと見られ、水銀朱と漆を混ぜて塗られたものと推定される。これらの顔料水銀朱は、九州の一部区域を除いて全て日本列島産の天然辰砂と認められている。

水銀鉱床群域内に位置する縄文時代水銀朱生産遺跡は、次の5ヶ所が知られている。

- ①三重県度会郡渡会町 森添遺跡 (縄文後期・晩期)
- ②三重県一志郡嬉野町

天白遺跡 (縄文 後期・晩期)

③三重県一志郡嬉野町

下沖遺跡 (縄文 後期・晩期)

④三重県多気郡多気町

森荘川浦遺跡

(縄文後期)

⑤徳島県徳島市国府町

矢野遺跡 (縄文 後期・弥生時代)

(以上「朱の考古学」市毛薫)

①④の遺跡は大和水銀鉱床群に位置し、⑤は阿波水銀鉱床群に位置し、何れも古代からの有数な水銀産地である。

水銀朱生産遺跡については、今後新たな遺跡発見が行われる可能性が十分にあると思われる。特に、大和水銀鉱床群内にあつては、縄文時代の住居遺跡や磐座などの縄文祭祀遺跡が多く発見されている大和宇陀郡において発見される可能性が高いと思われる。

2 丹生地名と水銀鉱床群

「丹生」は今日地名と残っているほかに河川、溪谷、山岳、社寺、氏族などに冠せられて、沖繩・北海道を除く各地に分布している。

「丹生」地名を有する地域にはかつて辰砂が産出していたものである。

丹生地名の残る場所として次のような場所があげられ、そのいずれの地の土壌からも水銀の検出がされている。

- 一． 出羽・北村山郡の丹生 (現・尾花沢市)
- 二． 上野・甘楽群の丹生 (現・富岡市、上丹生・下丹生)
- 三． 上野・多野郡の丹生 (現・鬼石町浄法寺)
- 四． 越前・丹生郡 (現・清水町竹生の場合)
- 五． 越前・丹生郡の丹生 (現・武生市丹生郷)
- 六． 若狭・三方郡の丹生 (現・美浜町)
- 七． 若狭・遠敷郡の丹生 (現・小浜市太良荘)
- 八． 近江・伊香郡の丹生 (現・余吾村、上丹生・下丹生)
- 九． 近江・坂田郡の丹生 (現・米原町、上丹生・下丹生)
- 一〇． 伊勢・多気郡の丹生 (現・勢和町)
- 一一． 大和・宇陀郡の入谷 (現・菟田野町)
- 一二． 大和・添上郡の丹生 (現・奈良市丹生町)
- 一三． 大和・吉野郡の丹生 (現・下市町)
- 一四． 紀伊・伊都郡の入郷 (現・九度山町)
- 一五． 紀伊・那賀郡上丹生谷 (現・粉河町)
- 一六． 紀伊・有田郡の丹生 (現・金屋町)
- 一七． 紀伊・日高郡の丹生 (現・川辺町)
- 一八． 攝津・武庫郡の丹生山 (現・神戸市兵庫区)
- 一九． 但馬・城崎郡の丹生 (現・香住町浦上)
- 二〇． 備中・後月郡の丹生 (現・伊原市)
- 二一． 讃岐・大川郡の丹生

(現・大内町町田)

二二． 阿波・那賀郡の丹生谷 (現・鷺敷町仁宇)

二三． 豊後・北海郡の丹生 (現・大分市坂市町)

(以上「朱の考古学」市毛薫)

以上の23例の他、異字を含まない丹生地名を全国46箇所見出し、それらを日本列島図に落とし、みると図のようになった。(松田・矢嶋博士による研究)

図1 日本列島の水銀鉱床と丹生地名



図 丹生鉱床と丹生神社・丹生地名の分布

五、宇陀の朱にまつわる記録

宇陀の地で、丹生（朱）が採取されていた事を示す文献ははるか後の古事記、日本書紀の時代まで待たなくてはならないが、そこには以下のような記述があり、宇陀の地がまぎれもなく古代から続く貴重な水銀朱の生産地であったことが分かる。

1 古事記による伝承

最も古い朱にまつわる伝承は「古事記」に次のような記述がある。神武天皇（イワレヒコ）が大和の宇陀に出陣し、宇迦斯（ウカシ）兄弟を平らげようとしたとき、兄宇迦斯は反抗し、謀略によって道臣命（ミチノオミノミコト）らを逆襲しようとしたが自ら仕掛けたわなにかかり命を落とした。

己が作りおける押しに打ちたえて死にき。速控きだして、斬り散りき。故その地を宇陀の血原とな

も謂ふ。（岩波文庫「古事記」）

血原とは血のように赤い色の土地という意味で、おそらく宇陀の地域には辰砂粒の散在していた時期があり、血原の地名の元となったと思われる。

其地より幸行せば、尾生る人、井より出で来。其ノ井光れり、汝誰ぞと問はせば、僕は国神、名は水鹿と答曰しき。（此れは吉野首等が祖也）即て其の山に入りましかば、亦尾生る人に遇へり。

此の人、巖を押し分けて出て来。汝誰ぞと問はせば、僕は国神、名は石押分之子、今天神の御子幸行すと聞ける故に参る向かえまつるにこそと答曰しき。（此れは吉野国巢の祖也）（岩波文庫「古事記」）

「井光」とは、水銀採掘鉱を示しており、「尾生える人」は、腰に尻当てを紐でぶら下げた水銀採掘者とみなせ、神武東征の神話時代から大和に水銀採掘の集団がいたことが示されている。なお、「井光」

は、現奈良県川上村井光であろうと推定される。

川上村井光のその場所は、山中腹にあり直径50m程度のくぼ地である。ちょうどUFOが着陸したような地形をしている。くぼ地でありながら水は溜まっておらず、中央部の小さな竖穴から水は地区外に排出されているようである。確かめたわけではないが、明らかに坑道らしきものが奥深く続いているかのようなのである。

2 万葉集による伝承

大和の 宇陀の真赤土の さ丹
著かば そこもか人の 吾を言な
さむ(万葉集巻七)

大和の宇陀地方は文字通りの赤土地帯と解釈すべきでなく、「真赤土」の産出地であって、それは辰砂を意味し、宇陀辰砂が平城貴族に多く知られていたことを示している。

この宇陀地方は施朱の風習下にあつては生命蘇生力を有する神聖

な赤の地域であり、そこに生育する野草は薬猟の対象とされた。

万葉集の時代は、朱を尊ぶ施朱の風習の晩期にあたり、宇陀の地域での朱採取はかなり下火になっていたと思われる。

3 地名が示す「朱」

宇陀、榛原の地にある「赤埴」は地名として残っており、まさしく赤い土の産するところであつた。

この土はベンガラ朱と思われ、古代においては水銀朱より多用されていたものと思われる。

また、榛原町内牧の集落のはずれにある「血原」という地名は、「古事記」に記されている場所そのものであり、まさしく「血原」が水銀朱の採れる場所を指し示していることがわかる。

その他、榛原町の西のはずれに「丹生神社」が祀られ、その裏山には巨石が三個半円状に並んでいるといわれている。また、榛原町北方にある荷坂という地名も「丹坂」であつた可能性もあり、この地

における「水銀朱」の採掘あとの発見の可能性も考えられる。

六、朱の生産地と縄文集落

榛原を含む宇陀の地は大和水銀鉱床の中心をなし、つい最近まで水銀鉱山が存在していたことが分かっている。

特に、宇陀の内牧川沿いには、古代から「ベンガラ」や「水銀朱」の採掘が行われ、採掘をする人、これらを精錬し「朱」を作り出す人、それらを手に入れ全国に配送する「交易人」、それに朱の採掘に携わる人たちの家族など、かなり多くの人々がこのあたり一帯に住み、働いていたことが想像できる。

朱を手に入れ全国にこれを配送する人たちが既にこの時代に存在し、「交易人」は、北は北海道から南は九州まで、古代人にとって貴重な朱を運び、代わりに食料やその他の貴重鉱物などを手に入れ「商売」をしていたのではないだろ

うか。

「交易人」は、川を動脈とし水流の緩やかな時期に川を遡り、水流の急な時期に川を下つていたものと思われ。川を遡つてくるときは、朱の生産地の集落に必要な生活物資や嗜好品、石器などの道具を積んでいたのであろう。帰りは、それらと交換した朱の甕を満載して川を下つていったであらう。

また、これらの商品の交換は、どこか「市場」のような場所があり、そこで品物の交換が行われ、多くの人の集まる場所であつたかもしれない。これらの「市場」は、おそらく川の合流地点にあつて、本流を通る船や支流を通る船からも便利な場所にあつたであらう。

「市場」の場所を特定する資料はないが、内牧の丹生生産地に近く、かつ支流が幾つか集まってくる「交通の要衝」にあつたことは間違いない。考えられる候補地の一つが内牧川と名張川の合流点近く、現在「市場」と言う地名が残っているところである。ただ、

この市場と言う地名が古代の地名を伝えているのか、あるいは、はるか後の時代の地名を伝えているのかは不明であるが、地理的条件からその可能性はあると思われる。

今ひとつの場所は、榛原町より下流8kmのところにある室生村の大野と言うところである。この場所は、室生川と宇陀川が合流するところであり、川が大きく屈曲していることからその流れは弱くなる場所である。また、川に接しかなり広い平坦地があり、多くの人口を収容することが出来、その背後地にかんがりの集落地を抱えることができる地形にある。しかも、この屈曲部には、巨大な岩がありあたかもここが朱の交易の中心であることを指し示しているかのようにそびえている。

いずれにせよ、名張川に面するところに朱の交易市场があり、多くの人でにぎわっていた様子を想像することは楽しい。



七. 朱の流通と縄文回廊

古代人にとって朱は貴重なものであり、手に入れるためには多大の犠牲を払ってでも手に入れたであろう。そこに、朱を掘り、精製し、全国に交易する人が生まれた。これは貴重な黒曜石が生産地から遠く離れた縄文集落から発見されることから、このような交易する人の存在が証明される。

朱の採れるところは限られてお

り、その採れる量は少量である。特に、「水銀朱」はごく限られた地域でしか採れず、その量はわずかである。「水銀朱」が採れる地域は和歌山県と奈良県の両方を流れる吉野川沿岸と木津川支流の名張川及び宇陀川沿岸に限られているようである。

ところで、吉野川最上流部と宇陀川最上流部(内牧川上流部)とはわずかな距離しか離れておらず、遠い昔には、ルートとして繋がっていたのではないか。

このように、朱の産地を中心に日本海と太平洋をつなぐ「大環状ルート」が存在していたかもしれない。これを「縄文回廊」と名づける。朱は日本

全土に交易されていて、この宇陀地域は一大朱生産地として大なる繁栄を示していたのではないだろうか。当然、朱の生産地には朱に関わる生産者はもちろん朱の精製に関わるひと、また道具の生産など間接的に関わる人たちがその家族を入れれば相当数の人間が居住していたことは想像に難くない。一大都市を形成していたものと思われる。その一つの表れが随所に残されている「祭祀遺跡」としてのイワクラであったのではないか。



図 縄文回廊

イワクラは、そこに住む人たちの精神的な安寧を守るための祭祀場所というだけでなく、朱の生産現場での事故から生命を守るための実質的な祈りの場であったものと考えられる。

また、朱の生産地へ安全に交易者を導く道標であり灯台であったかもしれない。

八、朱の生産の場を指し示す「道標」としての立石（立神信仰?）

朱の交易のための流通ルート「縄文回廊」と名づけたが、この回廊に沿って川を図上で遡ってみると、いくつか特徴的なことがわかる。本流から支流に分かれるところの眼につく山上などに巨石遺構が存在しているのである。（全てを確認したわけではないがかなりの

確立で正しいと考えている）

例えば、木津川を遡って来ると巨石遺構が山頂の随所に存在する「笠置山」があり、それは木津川本流と支流の布目川の目印となって



笠置山の巨石

おり。この布目側沿いには多くの縄文集落があり、また丹生町のごとく「水銀朱」を産していたであろう地名も残っている。この丹生（朱）の産する場所を指し示すかのように対岸の山頂部に「柵形岩」という巨石が存在している。このように支流との分岐点や朱の生産

地を指し示すにランドマークとしての巨石遺構が見られることが多い。



柵形岩

榛原町内においては、下つ戸の立て石は明らかに宇陀川と荷坂川の分岐点を示している。

宇陀川と内牧川との分岐点を示すランドマークは今のところ明確でないが「福地岳」そのものがランドマークでなかるうか。内牧川を遡っていくと随所にランドマークと思える巨石遺構が川から遠望でき、特に嶽の立て石は「丹生」（朱）の

鉱山の場所を指し示しているように見える。（嶽神社のある山一帯が水銀の産出場所である可能性は高い）

この他、「赤埴」の採れる場所を指し示すランドマークもあるはずである。（位置からいえば大將軍山の巨石遺構、立て石が存在するようである）

今後、これら巨石遺構と朱の産出現場との調査によってこの巨石遺構と「丹生（朱）」の関係が明らかになるかもしれない。

なお、各所に存在する「岩窟」はひよつとすると「丹生（朱）」の採掘現場である可能性もあり、この点の調査も重要である。

九 榛原町内牧川沿いのイワクラと立石

榛原町内牧川沿いのイワクラと立石について全てが明らかになっていないわけではない

が、古文書や地域の伝承などから概ね図に示すところに存在している。

① 高城岳の磐境
高城岳八合目当りの西南面

にある「ジョウセン岩」（ストーンサークル）
頂上よりやや下に位置する磐座から内牧川が見下ろせる。
内牧川を航行する人にとってのランドマークではないか。

② 大将軍山の磐境

大山祇神社の祭祀場跡
その周辺一帯にある巨石群
スケールの大きい磐座であり、背後の大平山か茶臼山を祈る場所ではないだろうか。邪なものが入ると大蛇に飲み込まれるという言い伝えがある。

③ 神定の磐境

大字高井伊豆神社後方山頂に磐座があるといわれている。
社殿後方のものは短径34間、長径10余間の楕円型のストーンサークルである。

この一部の巨石の底部から打製サヌカイトの石斧3個発見されたという記録がある。

④ ゆうが谷の磐境

大字内牧と菟田野町大字岩端との境界分水嶺をやや岩端領に南下したところ
及びそれより70m下ったところに巨石がある。
嶽の立て石や蛇石と頂上をはさんで反対側に位置し、この



榛原町のイワクラと磐境

付近一帯は「丹生」の採れる場所である。

⑤ 高取山の磐境

高取山山頂8合目あたりの東南面の段地にある。幅5〜6間、長さ10余間の半楕円形のストーンサークルである。山頂には土壇と思われるものがあり周辺にとろどころ塊石の露出が見られる。

⑥ 嶽の立て石・寝石

立て石は、その規模の雄大さと立て石で尾根をサークル状に取り囲む特異な形状を示しているものや、尾根沿いに直線状に並んでいる状態のものなど他であまり見られない貴重な存在である。

その形状から、イギリスのストーンヘンジを連想させる。あたかも、暦として人々の日常生活をコントロールする装置であるかのようなものである。



⑦ 蛇石

立石から東に200mのところには蛇石がある。7mぐらいの巨石が尾根の突端部に横たわっている。その上部には蛇石の名の由来となっているU型の樋が見られる。その樋の内部は20cm間隔でのこぎりの歯状に段を形成してい

る。この樋に磨り潰した岩石の粉を水とともに流せば、その比重の差により辰砂が分離できるように見える。このことから、この蛇石は、丹生の精製のための道具であった可能性もある。

⑧ 下つ戸の立て石

荷坂川北詰の立石明らか、川の分岐点を示すランドマークであろう。荷坂は、また丹坂であろうと思われる。

⑨ 高星の磐境

大字荷坂と高星との間の「だだぼし」の山中に巨石がある。中腹部の西南面した採光よき背梁部にあり、形状は、台形の台座石の上に球形の巨石が載っている特異な形をしている。山添村のふれあい広場にある「長寿岩」と同じ形をしている可能性

がある。おそらく、太陽を表していると考えられ、太陽を祀る場所であった可能性が高い。

⑩ 洞窟

- 一 おむろの岩窟 大字自明字イハヤクボの山中、麓に近い斜面にあつて西面している。
- 二 不動の岩窟 大字檜牧乙区高星の北方山内麓に近い東面傾斜地
- 三 高倉の岩窟 要確認

巨石遺構や洞窟がこの地に多く存在しているのは何故であろうか。巨石遺構はその周辺から出土する遺物によつて縄文時代あるいはその以前から存在していることは否定できない。また、宇陀川の河床から縄文時代以前の「有舌石剣」が発見されており、宇陀の地が縄文以前から多くの人が住んでいた形跡が見受けられる。これら多くの巨石遺構はこの時代の人たちの何らかの必

要があつて存在したものであることは間違いないであろう。精神的な安寧を得るための祈りの場であるとか食料のめぐみを祈る場であるとか様々な解釈がなされている。これらの解釈は否定できないが、いくつかの磐座や立て石には単なる祈りの場というより、何かの場所を指し示す役割を持ったものが見受けられる。すなわち今の言葉で言う「ランドマーク」としての機能があつたのではなからうか。今後の検討が必要である。

十 おわりに

たまたま本屋で見つけた「朱の考古学」（市毛薫著・雄山閣出版）に出会い、その後「古代の朱」（松田壽男・学生社）に出会った。「古代の朱」が昭和50年であり、「朱の考古学」が平成10年と新しく、後者が前者の引用などをされてお

り、前者を踏まえてさらに発展された内容になっている。いずれにせよ、この二つの本により丹生（水銀朱）が想像もつかない古代から産出されており、人類の生活の中に溶け込んでいたことが分かった。しかも、その丹生（朱）が私のごく身近なところにあつたことに驚きを感じた。

当初、丹生（朱）のことを知らず榛原町にある巨石に憑かれて調べているなかで、この宇陀一帯が丹生（朱）の産地であることを知り、丹生（朱）と巨石とは何らかの関連があるのではないかと思うに至つた。そのような目で、今一度自分の知っている巨石地帯を見直してみると、山添村の神野山の麓、北野あたりの巨石地帯の足元には「丹生町」があり、かつて丹生（朱）を産出していたことが分かつた。その他、巨石をたずねて行くとその近くに丹生（朱）の産地があることに度々出会つた。その後、地図上で調べてみるといわゆる古代の朱の生産地と巨石地帯が重なり合う事が分り、古代

の巨石文明と朱（朱に限らず古代の貴重鉱物資源産地）とはかなり密接な関係があるのではないかと感じていた。但し、これは地図上でかなり縛とした見方での話であり、今後、巨石地帯イコール朱の生産地帯及び鉱物資源生産地帯と言う図式を明らかにしていきたいと思う。

最近、東北に住む会員からピラミッド山と巨石遺構についての情報を頂いた。場所を確かめると山形県の尾花沢の近くである事が分かつた。まさしく丹生（朱）の産地である。しかも、そのピラミッド山が「水晶山」と呼ばれており、これもまさしく古代の人が追い求めた貴重鉱物資源である。朱と水晶、共に古代人が追い求める鉱物資源のその場所にピラミッド型の山があり巨石遺構が存在しているということ、これは偶然ではなく古代の貴重鉱物資源産地と巨石遺構の関連が示されているのではないだろうか。

お願い
全国の会員の皆様のご協力が是非必要です。地元、もしくはよく知っている巨石地帯と丹生の関係を示す情報があればご一報ください。

参考文献

- 「朱の考古学」 市毛 薫
- 雄山閣出版
- 「古代の朱」 松田寿男
- 学生社版
- 「神武天皇建国聖地内牧考」
- 菟田高城顕彰会編
- 「石器時代の驚異」 リチャード・ラジリー（安原和見訳）
- 河出書房